

<研究ノート>古典派経済学の外国貿易論(中の一)

著者	高橋 精之
雑誌名	社会労働研究
巻	15
号	1
ページ	81-129
発行年	1968-09-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017816

古典派経済学の外国貿易論（中の一）

高橋精之

はじめに——主題の性格

第一章 二つの世界観——スミスとリカード

第二章 二つの比較生産費説——リカードとミル（以上第十四卷第二号）

第三章 物価水準の国際的差異——リカードとシーニョア（本号、但し未完）

第四章 比較生産費説の政策論的帰結——シーニョアとリスト

第三章 物価水準の国際的差異——リカードとシーニョア

一

前章までにおいて、古典派経済学の外国貿易論を支えていた問題意識は次のようなものでした。

古典派経済学の外国貿易論（中の一）

「製造業の発達している先進国イギリスは穀物生産においても外国のそれより生産性が高く、したがって小麦一ブツシエルに含まれている価値量は外国の小麦一ブツシエルに含まれている価値量よりも小さく、したがって価格もより低い筈なのに、実際には価格がより高く、したがって、自由貿易にすれば、イギリスの小麦が外国に輸出されるのではなく、逆に、外国の小麦がイギリスに輸入されるようになるが、これは何故なのか」

または、こういうことでした。

「生産力上の優位が一方の国に偏っているのに、一方的外国貿易ではなく、相互的外国貿易になるのは何故なのか」

いわゆる比較生産費説、とりわけリカードが問題にしたかぎりでの比較生産費説がこのような問題意識の産物であること、そして、比較生産費説の核心が「外国貿易において先進国は後進国を搾取している」という命題にあることは、前章までにおいてすでにみたとおりであります。繰返し申しますが、この命題を導きだしたリカードの理論的功績は決定的に巨大なものがあります。しかし、それにもかかわらず、といいましうか、それ故に、といいましうか、その理論が現代に継承されていないこともまたたしかであります。たとえば、ブルジョア経済学は、すでに第二章でミルについてみましたように、リカードの比較生産費説から価値を排除き、物々交換の世界だけで比較生産費説を再構成しました。それというのも、資本主義世界の構造的不均衡を前提とするような理論は、たえず調和的理論をつくることを義務づけられている彼らにとって到底受容れることはできませんし、「外国貿易において先進国は後進国を搾取している」などという話に至っては彼らの階級的良心からいって是が非でもこの世から抹殺する必要があるからです。ですからそういう心仄しい意図の下に再構成されたミルの比較生産費説がリカードのそれとは似ても似つかぬも

のになっていったのはある意味で当然のことです。他方、いわゆるマルクス経済学の方は、マルクスが外国貿易論を体系的にまとめないままに死んだこともあって、いいにもわるいにもこの分野で大きな理論的前進を示すことができませんでした。たとえば、十九世紀末のドイツ社会民主党の理論家たちは、当時、ロシアや合衆国の小麦が津波のように押しよせてきて、西ヨーロッパの穀物生産が恐慌状態に陥ったとき、ロシアや合衆国の小麦が西ヨーロッパの小麦より安価である原因は、ロシアの小麦についていえばロシアの農民の農奴的な低い生活水準のためであり、合衆国の小麦についていえば合衆国に地代がないせいであると個別的に説明しました。大体、科学の方法として、ひとつひとつ説明が異なるというのは分析無能力を示していますし、説明があまりにも現象的です。それになによりもよくないことは、価格の世界で原因の説明をすればそれでもう十分だと考えていることです。一体、マルクス経済学の原因である価値論はどこへいつてしまったのでしょうか。それとも、彼らは、ロシアや合衆国の小麦の低い価格の原因を説明すれば、それはとりもおさず、価値の低いことの原因を説明したことにもなるとでも考えていたのでしょうか。もしそうだとすればそこには二重の誤りがあります。

1. 価格が低いことの原因説明は価値が低いことの原因説明でもあるという考えの底には、結局、アダム・スミスの世界観、すなわち、国内市場におけるのと同じような価値と価格の比例関係が世界市場にも成立しているという世界認識が暗黙の裡にせよ存在しているわけです。これでは、リカードがなんのために比較生産費説を提起したのかわからなくなります。ロシアや合衆国の小麦はイギリスの小麦より価値が大きくとも、ロシアや合衆国の社会全体としての生産力水準の低さの故に、価格としてはイギリスの小麦よりも低くなる、彼らドイツ社会民主党の理論家にはそういう本質的な理解に対する予感すらありません。これでは、まったく、アダム・スミスへの後退です。

2. よしんば価値と価格の比例関係が世界市場においても成立しているとしても、彼らの説明では価値の低いことの説明にはなりません。すなわち、ロシアの農民の生活はたしかに農奴のように劣悪なものであったでしょう。しかし、だからといって、そのことはロシアの農民の生産物の価値が低いことの説明にはなりません。生活水準または生活費と生産物の価値とは全く異なった二つの概念だからです。また、地代にしても、地代がなければその分だけ価値が低くなる筈だということには必ずしもなりません。差額地代にみられるように、地代があろうがなかろうが、生産物の価値は同じということが十分にありえます。

実際、社会科学というものは、時代がすすむにつれて発展するとは必ずしもいえないということがこのことからわかります。それだけに今日、外国貿易論におけるリカードの功績にはっきりと照明を当て、経済学の歴史の中で久しく「死んだ犬」として扱われてきた彼の外国貿易論を復活させる必要があると私は考えるのであります。

ところで、古典派経済学の外国貿易論は現実世界のもうひとつの事態を問題にしました。それは次のようなものです。

「物価水準が国によって異なるのは何故か」

より具体的には

「製造業の発達した国ほど物価が高いのは何故か」

この問題は、一見、前章までの問題と全く無関係の、全く別の問題であるかのようにみえます。しかし、実際にはそうではありません。私たちは前章において、第3—1表（一一〇頁所載）のⅠ（前章の第2—1表と同じ）のような価値関係にある二つの国が、価格関係としては、第3—2表（一一〇頁所載。前章の第2—3表と同じ）のⅢになるこ

と、および、その経済的意義を示しました。この場合、先進国の商品においては、国家的規模において、価値の割増評価がおこなわれ、そのことが、後進国との外国貿易において不等価交換の生じる契機になるのですが、先進国の商品の価値量が後進国の商品のそれに比してより小さいため、価値の割増評価にもかかわらず、物価水準としては、先進国イギリスは後進国ポルトガルとほぼ同じであること、第3―2表のⅢの示すとおりであります。しかし、現実の世界においては、先進国は後進国に比して物価水準が高い、という事態、第3―2表で云えばⅤのような事態が存在しているというわけです。古典派経済学はこの事態の原因およびその事態の経済的意義を追究しました。ですから、この問題は、第3―2表を共通の場として、前章の問題と関連した問題であり、いわば、前章がⅢを問題にしたのに対し、こんどはⅤを問題にしようというわけです。そして、そこに一貫して貫かれている問題意識は、不等価交換であり、前章のⅢからこんどはⅤへと、不等価交換は一層激化してゆくわけです。

尤も、古典派経済学自身は、このように問題を秩序立ててすすめていったわけではありません。また、単刀直入に物価として問題にしたわけでもありません。この事態を主に問題にしたリカードおよびシーニョアについてそれをみますならば、これからの話でおわかりのように、リカードは貨幣価値の国際的差異として、シーニョアは賃金の国際的差異としてこのことを問題にしました。しかし、物価水準の国際的差異とは、貨幣の側から云えば貨幣の交換価値の国際的差異のことですから、貨幣価値の国際的差異に関するリカードの理論は、第3―2表のⅢを貨幣の側から問題にしたのにとどまっているとはいえず、Ⅴ、すなわち、物価水準の国際的差異の問題に対する理論的解決の鍵を提供しています。また、シーニョアも、賃金といっても実質賃金ではなく、名目賃金の国際的差異を問題にし、実質賃金については差異を考えていないことからわかりますように、その底には、物価水準の国際的差異という事実認識をひ

そめているのであります。

それにしても、「物価が国によって異なる」、「製造業の発達した国ほど物価が高い」という現象は奇妙なものです。私たちが学んできた経済学の一般常識からすれば、各国が貴金属、たとえば金を共通の貨幣にしているならば、一時的攪乱は別として、物価水準は諸国間で同一、したがって、その間に差異の生じる余地はない筈です。いわんや、一国内では生産力の発展とともに商品価格が下がるのが通常であることを考えますなら、「製造業の発達した国ほど物価が高い」という事態に至ってはますます不思議なことです。まったく、現実の世界は経済学の一般常識をせせら笑っているようにみえます。ですから、そういう一般常識の中で育ってきた私たちからするなら、むしろ逆に、経済学の一般常識に挑戦している古典派経済学者のそのような現実認識の真实性を疑いたくなります。しかし「製造業の発達した国ほど物価が高い」ということは資本主義世界の歴史に一貫して存在している事実のようで、たとえば、二〇世紀の初頭にイギリスのある経済学者は主題からいくぶんはずれた個所においてですが次のように述べています。

「ドイツにおけるマルクの購買力はイギリスにおけるポンドの購買力と比較して、長い目でみると、両国の交換レートが保証しているものよりもはるかに高い。この傾向は、両国間の貨物の自由な交流が政府の規制によって束縛されているという事実によって促進され強められている。かくして、ドイツの通貨は外国の居住者の手中にあるときにはその購買力の一部分を奪われているのである。」(E. Sykes, *Banking and Currency*, 1904, p. 222)

現代でも、たとえば、合衆国の物価は日本よりも概して二倍も高いといわれています。ですから、私たちは、経済学の一般常識を楯にとって古典派経済学者の現実認識の真实性を疑うという没科学的な態度、不生産的な態度をとるよりも、むしろこの事実を率直に承認し、その上に立脚して、外国貿易といいますが、世界市場といいますが、そこ

では何故にそのようなことが生じるのか、その原因、また、そのような事態が経済学的にみてなにを示唆しているか、その意義を明らかにし、それによって私たちの一般常識をヨリ現実的にした方が有意義のように思います。

それにもうひとつ、この第三章には、第二章同様、ブルジョア経済学に対するひとつの批判がこめられています。一般に、ブルジョア経済学は、資本主義社会の永遠性を人々に示さなければならないというその階級的使命と関連して、この資本主義社会を調和的に描くことを義務づけられています。何故なら、彼らの中にはケインズのように「不調和でなにがわるい」とひらきなあった経済学者もいないではありませんが、概していえば、人々は、「調和的な存在は永遠に存在する」と考えており、したがって、ある存在が永遠であることを証明しようとするなら、人はそのものが調和的存在であることを証明してみせなければならないからです。外国貿易論においては、このことは、資本主義世界に現実存在する「生産力の構造的不均衡」を隠蔽し、この世界を永遠調和的に描くことを意味します。そこで、ブルジョア経済学は、まず、比較生産費説については、その理論的前提である「生産力の不均等分布」という不調和な世界観の毒性に気付き、その世界観を抜きにして、すなわち、生産力関係、価値関係を抜きにして比較生産費説を再構成しました。その結果は、前章ですでにみましたように、共存共栄、相互利益の比較生産費説でした。つぎに、ブルジョア経済学は、物価水準の国際的差異を気にしました。それというのも、物価水準が国によって異なるということは、なにかこの資本主義世界のアンバランスぶりを暗示していて都合がよくないからです。しかし、この事態は価格の世界という現象の世界で生じていることです。比較生産費説のときのように、目にはみえない価値のことだからといって抽象することはできません。そこで、比較生産費説の場合には、比較生産費説を骨抜きにするが、比較生産費説の形は残すということでしたが、この場合には、骨抜きの余地がないので、この現象自体を問題に

しないという作戦にでました。「物価水準の国際的差異」という事態が今日に至るもなお、いやそれどころか、資本主義世界が発展するにつれて一層激化し、今日、誰の目にも明らかになってきているにもかかわらず、そしてまた、その「有能」ぶりについては「定評」のあるブルジョア経済学者が年毎に多くなっているにもかかわらず、それにもかかわらず、古典派経済学以後、「物価水準の国際的差異」についてはみるべき研究史がほとんどないというのは察するにこのためなのです。彼らはこの現象を問題にすること自体の危険性を本能的にかぎつけていたのです。ですからこのことは逆にいって、私たちが今日「物価水準の国際的差異」を問題にすることは、そのこと自体がブルジョア経済学のゴマカシの態度に対するひとつの批判となることを意味します。勿論、その理論的解明が正鵠を得ていなければどうしようありませんが、この現象を問題にすることには、経済学史上、また思想上、こういう意味合いが含まれているのだということはよく知っておいて頂きたいと思います。

この問題をめぐる経済学上の諸問題については、まだ他にいくつか述べておきたいこともありますが、序論があまり長くなつては、よくありませんので、この辺で本論に入つてゆきたいと思ひます。ただ、あらかじめお断わりしておきますが、「製造業の発達した国ほど物価が高い」という事態が成立する原因、およびその経済的意義、この二つの問題の内、後者は第四章での問題と関連しますのでそちらへまわすことにします。したがいましてこの第三章では、前者、すなわち「製造業の発達した国ほど物価が高い」という事態の成立する原因に限ってこれから検討していつてみたいと思ひます。なにぶん、問題が未開拓であり、さきの比較生産費説のときと異なつて古典派経済学以後は参考になるような理論的成果も殆どありませんので、どのていどうまくこの問題を解決できるか、私自身心許なく思ひつておりますが、とにかく話をはじめてみたいと思ひます。

二

この章での主役は、勿論、副題にも記しましたように、リカードとシーニョアです。しかし、スミスの「諸国民の富」を読み、リカードの「経済学および課税の原理」を読みますと、私たちは、リカードの外国貿易論がスミスの饒舌な話からいかに多くの貴重な示唆をえているかということをつくづく感じます。そのひとつはすでに第一章で「生産力の不均等分布」ということで示しました。尤も、その示唆をリカードは自分の創造的思索のきっかけとするだけで、鵜呑みにしたり、二番せんじの種にすることはありません。そこがまたリカードのよいところでありますが、事情がそういうことでもありますので、この章の主題である「物価水準の国際的差異」についてのリカードの理論の検討に入るまえに、リカードの引立て役として、また、リカードの理論に経済学史上の背景を与えるためにも、スミスにまず御登場を願おうと思います。

一体、「諸国民の富」におけるスミスの基本的発想からするならば、物価水準が国によって異なる、というような考えはできません。物価水準はどの国においても同じです。と申しますのは、一般に、物価といいますが、価格は商品価値と貨幣価値との関係において決まります。そこで、まず、前者についてのスミスの考え方をみるなら、すでに第一章において「生産力の均等分布」ということで述べましたように、個々の商品の生産力水準、したがってまた価値水準は国によって異なるかもしれないが、すべての商品の平均的生産力水準、したがってまた価値水準はどの国を比較しても同じであると彼は考えます。後者の貨幣価値についていえば、これはスミスに限ったことではありませんが、一般に、古典派経済学者は、貨幣を商品の一種、商品の中から生まれたものとはみずに、商品流通の世界の

中へ外から持込まれたものとして貨幣を考えます。つまり、貨幣を商品と異質なものと考え、商品価値を測る物差し（価値尺度）および商品流通の媒介物（流通手段）と考えるわけです。ですから、商品については国によって価値が異なることを認めますが、物差しであり媒介物である貨幣については、物差しが丁度そうであるように、万国その価値が同じと考えます。一国についていえることは世界についてもそのままいえるという、スミスの万民主義的な考え方がその貨幣価値観を補強します。そうなりますと、すべての商品価値も国際間で相互同等、貨幣価値も国際間で相互同等ということになりますから、結局、その二要因の合成関係である物価も国際間で相互同等、すなわち、国によって物価水準の異なることはない、という結論になります。勿論、「諸国民の富」の中に、こうかいてあるわけではありません。ただ、スミスの世界観からすれば、こういう結論になるのではないか、と私は考えるのであります。

ところが、スミスは「諸国民の富」の第一編の最後の部分、すなわち、「過去四世紀間における銀の価値の変動に関する余論」の個所へきて突然、彼の世界観に悖る不調和な発言をはじめます。

「金・銀の価格は、もっと豊富な諸鉱山が偶然に発見され、それがこの価格をひきさげておくようなことがないかぎり、各国の富とともに自然に上昇するものであるから、諸鉱山の状態がおよそどのようなものであろうとも、どのような時代にも富国でのほうが貧国でよりも高いのが自然である。他のすべての商品と同じように、金・銀も最良の価格が支払われるような市場をさがし求めるのであって、しかもあらゆる物に最良の価格が支払われるのは、そうするだけの余裕がもっとも多い国においてである。」（A. Smith, *The Wealth of Nations* [1st ed., 1776], Cannan ed., 1904,

p. 189, 岩波文庫訳、第二分冊、九八頁）

要するに、スミスは、国によって金銀の価格が異なることに注目し、「金銀の価格は貧国より富国の方が高い」、

または一國が富むにつれて金銀の価格は高くなる」との命題を提起しているのであります。しかし、この命題は、このままの形では、「物価水準は各國とも同じである」という、彼の世界観からくる帰結とどこで不調和をきたすのか、はっきりしません。また、本章の主題である「物価水準の國際的差異」の問題とどのように関連するのかもはっきりしません。そこでまず、私は次の三つの段階を経てこの命題を「物価水準の國際的差異」に即した形に加工してみたいと思います。

第一に、現代のように通貨といえは不換銀行券ばかりで、金・銀は商品としてデパートで売っているような時代においては、金・銀が貨幣だといっても一寸ピンときませんが、スミスの時代には、金・銀が貨幣でした。スミスは次のように述べています。

「本来、ある國に蓄積または貯えられているものと考えられる金銀は、つぎの三部分に區別することができる。すなわち、第一は流通貨幣であり、第二は、私人の家庭の金器銀器であり、最後は、多年の節儉によって集積され、君主の金庫のなかに貯えられてきたであろう貨幣である。」(A. Smith, op. cit., p. 407, 岩波文庫訳、第三分冊、三〇頁)ですから、スミスがここで「金・銀の価格」というとき、それは主に、「貨幣の価格」のことを意味していたのです。

第二に、しかし、「貨幣の価格」という言葉は矛盾した言葉であります。何故なら、「価格」とは貨幣で表現した商品の交換価値のことであり、したがって、「貨幣の価格」とは、貨幣の交換価値を貨幣自身で表現することになるからです。しかし、何人も自分で自分自身の姿を表現することはできませんのと同様、商品も他の異種類の商品があるから始めて自分の価値を交換価値として表現することができるのです。この辺にきますと、スミスにかぎらず古

典派経済学者に一貫した、価値に関連した用語法の混乱につきあたります。それというのも、彼らは価値と交換価値の区別をきちんとつけていないからです。スミスの「諸国民の富」でも、価値、実質価値、交換価値、価格、実質価格と、いろんな言葉がとびだしてきます。しかも、それらの言葉がそれぞれ別の意味かというところでもないのです。たとえば、「金・銀の価格」は次の頁ではもう「金・銀の価値」という言葉遣いになっています。

「金・銀は、もっとも富んだ諸国民のあいだでは最大の価値をもつのが自然であるように、もっともまずしい諸国民のあいだでは最小の価値をもつのが自然である。」(A. Smith, op. cit., p. 190, 岩波文庫訳、第二分冊、一〇〇頁)

といっても、そのことは、スミスがでたらめに言葉を用いているというわけではありません。私の検討したかぎりでは、スミスは、実質価値、実質価格というときは、その商品に対象化されている労働、すなわち、価値を意味し、価値というときは、その商品が交換のさいに購買しうる商品量、すなわち、交換価値を意味しているようです。ですから、スミスが、私が加工した場面で、「貨幣の価格」とか「貨幣の価値」とかいうとき、その実質的意味は、貨幣の中に含まれている労働、すなわち言葉の正確な意味での「貨幣の価値」ではなくて、「貨幣の交換価値」のことなのです。実際、スミス自身、「貨幣の価値」という言葉を「貨幣の交換価値」という意味で用いています。

「貨幣の価値は、それが購買するであろう生活必需品の量に比例する。」(A. Smith, op. cit., Vol. II, p. 369, 岩波文庫

訳、第四分冊、三六〇頁)

ですから、スミスの命題は、正確には「貨幣の交換価値は富国ほど高い」という風に表現されます。

第三に、ところで、貨幣の交換価値とは、それと対立している商品に即していえば、貨幣で表現した商品の交換価値、スミス流にいえば商品の貨幣価格であり、簡単にいえば商品の価格のことです。貨幣に対立する諸商品の価格と

いうことでいえば、物価ということになります。ですから、貨幣の交換価値と物価とは内容的には同じことであり、ただ貨幣と商品のどちらに即して表現するかの違いであり、両者は、当然のことながら、数学でいう逆数の関係にあります。したがって、スミスのさきの命題は、本章における主題、すなわち「物価水準の国際的差異」に合わせ、物価水準という面から表現するなら、「物価水準は富国ほど低い」という風に書き替えることができます。

さて、このような加工をほどこし、本章の主題に即した形でスミスの命題を表現しなおしてみますと、スミスの命題が奇妙な内容のものであることに改めて気付きます。

第一に、それは彼の世界観に反します。すなわち、まえにも述べましたように、彼の「万国同等」の世界観からすれば、物価水準はこの国においても同じである筈でした。しかるに、ここへきて、スミスは「富国ほど物価は低い」といいだしました。これは明らかに彼の世界観に反し、彼の論理感覚のわるさ、論理力の弱さを示しています。尤も、この論理不整合が、第一章で示した「生産力の不均等分布」の発言のように、彼のリアリズムの結果として生じているのだとしたら、それはそれなりに許せたと思います。しかし、それは、現実の姿を反映したものでありません。

第二に、スミスのこの命題は現実世界の事態にも反します。この章の最初のところでも述べましたように、現実の資本主義世界で生じていることは、「富国ほど物価が高い」ということです。そしてリカードにしてもシーニョアにしてもこの現実認識の上に立ってその原因の解明に努めました。しかるに、スミスは、よりによって、現実世界の姿を反映しているこの命題とはまさに逆の「富国ほど物価は低い」という命題を打立てました。尤も、もしスミスが、「生産力の不均等分布」という、ある個所では気付いていたリアリスティックな世界観の論理的帰結としてこの命題

を提起したのでしたら、それはその命題自体は誤りであるにせよ、興味ある問題を他方で示唆することになりますので、それはそれなりにあるていど許せたと思います。と申しますのは、たとえば、もし彼が「生産力の不均等分布」という現実世界の事態をふまえ、したがって商品価値は富国ほど低いと考え、他方、貨幣価値は古典派経済学者にふさわしく万国同等と考え、だから結局、物価は第3—2表の1のようになる、ということでは「富国ほど物価は低い」といいだったのでしたら、そのことは逆にいって、「生産力の不均等分布」という現実的な理論的前提と「富国ほど物価が低い」という非現実的な論理的帰結との間を媒介している、「貨幣価値はどこの国でも同じである」という一見自明の命題にそもそも誤りがあるのではないか、という大事な問題に人々を気付かせる契機になったであろうからです。しかし、スミスのここでの話は、そのように理論的にきちんとしたものではなく、価値論抜き単なる需要論で話をすすめているのですからあまり啓発的なものではありません。

このように、「富国ほど物価は低い」という、このスミスの命題が、彼の自然法的世界観の産物でもなく、現実世界の姿を反映したものでもないということになりますと、スミスがこの命題をめぐる展開している諸理論も亦、この章の問題の解明には直接役立たないわけですから、そのことだけからいえば、もうこれ以上あれこれこの命題を論じても無駄だということになりますが、スミスほどの人になりますと、転び方にも含蓄があり、それに、中国の昔の本も「他山ノ石、以テ玉ヲ攻ムベシ」と述べているくらいですから、この学殖の深いスコットランド人が何故檜舞台でドジを踏んだのか、その原因をすこし探ってみたいと思います。

スミスを考える場合、私たちは、彼がいい意味でもわるい意味でも自分の生きた時代に忠実だったということをつも氣にとめておかねばなりません。スミスはまさに「時代の子供」でした。彼の理論の中に、未来への暗示が

もしあるとすれば、それはとりもなおさず、彼の生きた時代そのものが未来への胎動を始めていた時代だったからです。また、もし彼の理論の中に限界があるとすれば、それはとりもなおさず、彼の生きた時代そのものにそういう限界があったからなのです。そのことは、さきほどのスミスの命題、「富国ほど物価は低い」という命題についてもあてはまります。私たちは、このような命題を導きだした彼の生きていた時代が、第一に、産業革命以前の、資本主義社会の本史がまだ開始されていない時代であったということ、第二に、とはいえ、いまや産業資本が自分の足で立つことを欲して重商主義政策を桎梏と感ずるようになった時代であったことを忘れてはなりません。現実の事態とは逆のスミスのこの命題はいいにもわるいにもこのような時代の産物だったのです。すなわち、

第一に。消極的にいって、正しい命題、すなわち、「富国ほど物価は高い」という命題に何故彼が到達できなかったかといえば、それは一口にいって、そのような状況を展開するかんじんの資本主義的生産様式がまだ社会的に確立されていなかったからです。のちに示しますように、「富国ほど物価は高い」という事態は資本主義の世界史的発展の中で展開されるものなのです。ですから、資本主義の世界史的発展はおろか、産業資本がイギリスの中でさえまだ社会的に確立していない当時にあつては、そういう事態そのものが現実の世界の中にまだ存在していなかったのです。したがって、そういう環境の下では、本来、資本の運動法則を理論化すべき経済学が、没資本主義的、その意味で、没経済学的になるのもやむをえません。それはスミスの富国概念に象徴的に表われています。スミスによりますと、この世界で最も富裕な国は中国だそうです。

「中国は、ヨーロッパのどの地方よりもはるかに富んだ国であり、そこでの貴金属の価値は、ヨーロッパのどの地方よりもはるかに高い。」(A. Smith, op. cit., p. 237, 岩波文庫訳、第二分冊、一九六頁)

私は当時の中国が本当に富裕だったのかどうかは知りません。こういう話は、往々にして、遠い見果てぬ国には金や銀がゴロゴロしていると夢想する欧米人特有の強欲根性の産物であることが多いのですが、それはともかく、当時の中国がよし金銀に富んでいたとしても、経済学はそれだけではそういう国を富裕な国とはいいません。経済学がある国を富国というときには、その国の資本主義的生産様式が高度に発展していること、ヨリ現象的にいえば、生産力と資本力が高度に発展していることを条件にします。これが富国の資本主義的理解、したがってまた、経済学的理解です。その点からスミスの富国概念をみますと、それは第一に、生産力概念に欠け、第二に、金銀が資本として理解されていません。要するに、経済学的概念として用いられていないということです。これというのも、彼の生きた時代そのものが資本主義的富をまだ成立させていなかったからで、ですから、彼の富国概念が没経済学的になってしまったのはある意味では当然であり、それは彼を責めるというよりは、彼の生きていた時代そのものもつ限界だったのです。

第二に。積極的にいって、正しい命題、すなわち、「富国ほど物価は高い」という命題をたてなかったばかりか、その逆の、「富国ほど物価は低い」という命題を彼が何故主張したかといえ、それは、当時の重商主義者が折りに触れて述べていた、「富国ほど物価は高い」という理論に反対するためだったのです。スミスはこの点をたとえば次のように述べています。

「昔の時代における諸物の貨幣価格を収集した著述家の大部分は、穀物や財貨一般の貨幣価格が低いということ、ことばをかえていえば、金・銀の価値が高いということを、これらの金属の払底ばかりではなく、そういうことがあった時代のその国が貧困で野蛮であった証拠だと考えているように思われる。こういう概念は、国民的富は金・

銀の豊富に存し、國民的貧困は金・銀の払底に存すると主張する経済学の体系とむすびついているのであって、わたしはこの体系について本研究の第四編で十分詳細に説明し吟味するように努力するであらう。当面わたしは、貴金属の価値が高いということは、そういうことがあつた時代にある特定の国が貧困または野蛮であつたということの証拠には全然ならない、ということだけを述べておこう。」(A. Smith, op. cit., p. 237~4; 岩波文庫訳、第二分冊、九五頁)

この場合、いまの私たちからみるなら、スミスは「物価はどこの国でも同じである」と主張して、重商主義者の理論を批判してもよかつたのではないかと思います。そのような主張なら、それは彼の調和的世界観に基づいたものですから、重商主義批判として論理的に整合されたものとなりますだけに、むしろ、その方がよかつたのではないかと思います。しかし、重商主義批判に張り切り、重商主義者のいうことなら一から十まで反対することに自己の歴史的使命を見出していた彼は、「物価はどこの国においても同じである」という論点で批判したのでは生ぬるくて満足できなかったのでしょう、そこで、「富国ほど物価は低い」という、重商主義者の理論とまさに正反対の理論を対置することによって重商主義を否定し去ろうとしました。そのために、彼は重商主義批判という点では一貫しているものの、自分が重商主義批判の立脚点としていた調和的世界観からも逸脱した話をする破目に陥ってしまいました。ここでもまた彼は「時代の要求」にあまりにも忠実すぎたといえるでありましょう。

さて、スミスが何故誤つた事実認識をしたのか、その歴史的、理由、とでもいうべき事情はこれでわかつたとしても、彼はどのような理論で、「富国ほど物価は低い」というこの命題を支えたのでしょうか。それをつぎにみてみたいと思います。理論分析の通常の方法からいうなら、まず理論の内在的分析、ついで理論の歴史的意義という順序になり

ますが、スミスのように「時代の要求」に忠実な人の場合には、理論の取扱い方も亦、逆になります。私の思いますに、この点に関するスミスの考えは次の二つの文章によく示されています。

「技術や産業が進歩するにつれて、衣・住の材料、大地からえられる有用な化石や鉱物、貴金属や宝石は、しだいにますます多く需要され、しだいにますます多量の食物と交換されるようになるはずであり、ことばをかえていえば、しだいにますます高価になるはずである。」（A. Smith, op. cit., p. 175, 岩波文庫訳、第二分冊、七〇頁）

「ヨーロッパの農業やもろの製造業の増大する生産物は、必然に、それを流通させるための銀貨の量の漸次的な増加を必要としたにちがいないし、また富裕な個人の数の増加は、かれらの銀器やその他の銀製装飾品の量の同様な増加を必要としたにちがいないのである。」（A. Smith, op. cit., p. 202, 岩波文庫訳、第二分冊、一二五～六頁）

すなわち、スミスは、国富の増加とともに金銀に対する需要は増大すると考え、ついで金銀に対する需要の増大とともに金銀価格が上昇し、金銀の量が増大すると考えます。

この場合、スミスのこの因果関係の図式はその一節一節が重商主義批判を示唆しています。と申しますのは、周知のように、重商主義者は、第一に、金銀こそ富であり、したがって金銀の増加に努めることこそ国富増加の捷徑であると考えました。第二に、この国富概念に接木されるのが、かの通貨数量説、「金銀が増大するにつれて物価が上がる」というあの命題です。その結果は、結局、「富国ほど物価が高い」ということになります。重商主義者はここから、「物価の高いことはその時代、その国の富裕の証拠であり、物価の低いことは、その時代、その国の貧困の証拠である」との結論を導きだし、当時おこなわれていた、原始的蓄積期に特有のインフレ政策を正当化しようとしたのであります。

これに対し、スミスは、まず第一に、重商主義者の富概念に批判を加えました。すなわち、重商主義者が金銀を以て富と考えたのに対し、スミスは「生活必需品および便益品」こそ富であると主張しました。いわば重商主義者が富の資本主義的形態規定を考慮したのに対し、スミスは即物的な、その意味では社会主義社会でも通用するような富概念を対置したわけです。尤も、一国の富裕の程度と金銀量の大きさとの関係についていえば、スミスも重商主義者と同じく、その両者の間に比例関係のあることは、すなわち、富裕な国ほど金銀が多いことはみとめます。ただ、重商主義者が金銀を富と考え、したがって富を増大させるには金銀を増大させなければならぬと考えたのに対し、スミスはスミスのいうところの富が増大すればおのずと金銀は増大する、したがって金銀の増大に努める必要はないとして、重商主義者を批判しました。スミスはこう述べています。

「どのような国でも、年々の生産物の価値が増加すれば、それにつれて貨幣の量も自然に増加せざるをえない。その社会のなかで年々に流通される消費物の価値がいっそう大きくなるのであるから、この価値はその消費物を流通させるためにいっそう多量の貨幣を必要とするであろう。……この場合、これらの金属の増加は、公共社会の繁栄の結果でこそあれ、その原因ではなからう。」(A. Smith, op. cit., p. 322~3, 岩波文庫訳、第二分冊、三五六頁)

第二に、重商主義者の愛好した通貨数量説についていえば、スミスはこの説を折りに触れて「俗うけのする観念(popular notion)」とよんで批判しています。たとえば、次のように述べています。

「もしかれらが、あらゆる国の銀の量は富の増加とともに自然に増加するから、その価値はその量の増加とともに減少する、という俗うけのする観念に影響されさえしなかったならば、おそらくは誤解に導びかれなかったであらう。」(A. Smith, op. cit., p. 188, 岩波文庫訳、第二分冊、九六頁)

勿論、スミスは、重商主義者が通貨数量説の例証としてよく挙げる、十六世紀から十七世紀にかけての南米での銀鉱の発見、銀生産の増加、それにともなう、通常、「価格革命」といわれている、物価の世界的騰貴の歴史的事実は、これは事実ですから認めるも認めないもない、承認します。

「一五七〇年ごろから一六四〇年ごろにかけての約七〇年の期間に、銀の価値と穀物のそれとのあいだの割合の変動は、まったく反対の経過をたどった。銀は、その実質価値において下落し、つまり従来よりも少量の労働と交換されるようになった。……アメリカの豊富な諸鉱山の発見が、穀物の価値との割合における銀の価値のこういう減少の唯一の原因であったように思われる。それゆえ、あらゆる人はこれを右と同じように説明したのであって、事実についてもその原因についても、論争などはまったくなかった。ヨーロッパの大部分は、この期間をつうじ、産業においても改良においても前進しつづけたのであって、その結果として銀に対する需要は増加していたにちがいない。しかしながら、供給の増加が需要のそれをはなはだしく超過したので、この金属の価値はかなり下落したように思われる。」(A. Smith, op. cit., p. 191, 岩波文庫訳、第二分冊、一〇三頁)

しかし、スミスは、これに対しては、第一に、南米における銀鉱の発見とともに物価が世界的に騰貴したのは、銀の生産量、したがってまた銀の存在量が増加したからではなくて、豊かな銀鉱の発見によって銀の生産費が低廉になったからであること、第二に、たとえ通貨数量説が是認されとしても、一国における産業の発展のさいのように、貴金属需要の増加にともなう金銀が増加する場合にはこの学説はあてはまらないと考え、この歴史的事実を通貨数量説の証明に用いること、および、通貨数量説を「富国ほど物価は高い」という命題の支柱にすることに反対しました。この点を直接論じたものではありませんが、スミスはこの辺の考えを次のように述べています。

「あらゆる特定国における貴金属の量は二つの異なる事情に依存しているように思われるのであって、まず第一には、それはその国の購買力、つまりその国の産業の状態、その国の土地および労働の年々の生産物に依存しているのであって、……また第二には、たまたまある特定の時期にこれらの金属を商業世界に供給しうる諸鉱山が豊鉱か貧鉱かに依存しているのである。……」

ある特定国での貴金属の量が以上二つの事情のうちの前者（購買力）に依存するかぎり、その実質価格は、他のすべてのぜいたく品や冗物と同じように、その国の富や改良とともに上昇し、その貧困や不振とともに下落しがちである。……

ある特定国での貴金属の量が以上二つの事情のうちの後者（たまたま商業世界を充足すべき諸鉱山の貧富）に依存するかぎり、その実質価格、つまりそれが購買しまたはそれと交換されるであろう労働や生活資料の実際の量は、疑いもなく、これらの鉱山が豊鉱であるのに比例して多少とも低減し、またこれらの鉱山が貧鉱であるのに比例して上昇するであろう。」（A. Smith, op. cit., p. 235-6, 岩波文庫訳、第二分冊、一九二〇三頁）

このような考えが、重商主義者の「富国ほど物価は高い」という命題を批判し、「富国ほど物価は低い」という正反対の主張を対置するさいのスマスの理論構造ですが、これはどうみてもお粗末、重商主義憎さあまりの勇み足しか考えられません。

第一に。スミスは、産業の発展した国では貴金属需要が増大するから、貴金属価格が騰貴すると述べていますが、一体、需要が増大すれば価格が上昇する、などというのは経済理論として全く俗流であり、またスミスらしくありません。スマスの経済学の良さは、需要の増加には、生産あるいは供給の増加が対応すると考え、したがって需要と供

給が均衡したさいに成立する価格水準を支えているものはなになのか、それを解明するところにあつたのではないでしょう。そしてまた、それこそがスミスの労働価値説の問題意識だったのではないのでしょうか。実際、スミス自身も他の個所では次のように述べているのです。

「需要の増加は、その当初においてこそ財貨の価格をひきあげるばあいもあるであろうが、ながいあいだには必ずそれをひきさげずにはおかない。すなわち、需要の増加は生産を奨励し、ひいては生産者たちの競争を増進させるのであつて、かれらはたがいにかれを売りたたくために、さもないばあいには思いもよらぬような新しい分業や新しい技術の改善にたよるのである。」（A. Smith, op. cit., Vol. II, p. 239, 岩波文庫訳、第四分冊、一〇四頁）

ですからもう、この「富国ほど物価は低い」という話は、労働価値説にもとる浅薄な話としかいいようがありません。古典派経済学の最良の人物たちを傷つけることが自分の歴史的使命であると考えていたマルサスが、早速、ここにスミス攻撃の格好の材料を見出したのも尤もなことです。

「すべてのときおよびすべてのところにおける価値の真実の尺度として労働を提案しているアダム・スミスが、かれの周囲を見まわして、しかも貴金属はつねにもっとも富んだ国でつねに価値において最高であるということができるといふことは、自分の理論を事実にもとづかせようとのかれの日頃の注意にもっともふさわしくない、とわたしにはつねに思われるのである。」（T. R. Malthus, Principles of Political Economy, 1820, p. 198, 岩波文庫訳、上巻、二九四頁）

第二に。勿論、こういう批判に対しては、いや、そういう話があてはまるのは、機械等を用いて、必要に応じて生産できる財貨についてだけで、貴金属のように思うままに生産できないものについてはあてはまらない、との反論が

あるかも知れません。実際、スミスは、貴金属については次のように述べています。

「貴金属の最高価格は、この金属自体が実際に希少か豊富かということ以外、他のどのような事情によっても必然的に決定されないように思われる。」(A. Smith, op. cit., p. 172, 岩波文庫訳、第二分冊、六三頁)

「有用性、美しさ、希少性というこれらの性質は、これらの金属(貴金属のこと―引用者)の高価格の本源的な基礎であり、いいかえれば、これらの金属がどのようなところにおいても多量の他の財貨と交換されうることの本源的な基礎である。」(A. Smith, op. cit., p. 173, 岩波文庫訳、第二分冊、六五頁)

要するに、貴金属の価格は希少性によって決まるのであり、製造業の生産物のように労働量の問題ではないというわけです。しかし、その理窟がよし正しいとしても、それなら、増大した貴金属需要が充たされぬままならともかく、スミスも認めているごとくその需要に应えて他国から流入してくるということになれば、希少性は薄れ、したがって高価格を維持することはできなくなるのではないでしょうか。スミス自身もすこしあとではそう述べています。

「その価値が主として希少性からひきだされるような生産物というものは、豊富になれば必然に価値がひきさげられる。」(A. Smith, op. cit., p. 171, 岩波文庫訳、第二分冊、六七頁)

もし、そうなら、スミスもみとめているように、富国には貴金属が、そこにおける貴金属需要につられて流入してくるのですから、富国における貴金属価格は下落する筈です。そうなれば、「富国ほど物価は低い」という彼の命題も成立しなくなる筈です。

第三に。第二項といくらか関連しますが、スミスは一方で、「富国ほど金銀価値は低い」という重商主義者の考えを否定して「富国ほど金銀価値は高い」ということを主張するために、富国における金銀需要の増大、それにともな

う金銀価格の上昇という話をします。他方、彼は、「国を富ますためには金銀を蓄積しなければならない、金銀を蓄積することこそ国を富ます捷徑である」という重商主義者の考えを批判して、「国が富むにつれて金銀はおのずと増加する。だから金銀の増加に努める必要はない」ということを主張するために、富国における金銀需要の増大、それにとまなう外国からの金銀の自然的流入、という話をします。しかし、富国における金銀需要の増大にとまなうこの二つの結果は必ずしも両立しません。外国から金銀が流入するのなら、富国における金銀価格は上昇しないのではないのでしょうか。また、富国において金銀価格が上昇するといえるためには、外国からの金銀流入のないことが条件になります。勿論、論理的にいつてこの二つは必ず相互否定的というわけではなく、ある場合には、この二つの現象は両立することもできます。しかし、そのためには、すなわち、富国における金銀需要の増大にとまなう、外国から金銀が流入し、かつ、金銀価格も上昇するといえるためには、富国における金銀に対する需要が外国からの金銀の流入量以上に大きく、したがって、後者が前者をカバーできない、ということが証明されなければなりません。ところが、そんなキメの細かい議論はどこにもおこなわれていません。問題意識としてすらないようです。要するに、スミスは一つの話で重商主義の二つの論点を無雑作に否定し去ろうとしたために、相互に矛盾した話をする事になってしまったようです。

第四に。これは私たち自身そう自覚していることではないのですから、スミス批判というよりは、私たちの自戒の問題としていいたいのですが、スミスにおいては、第一に、金銀が貨幣としてきちんと規定されておらず、第二に、ここが大切なところですが、貨幣としての金銀の国際的運動は、商品のそれとは基本的に異なった性格をもっていることについての認識がありません。まえにも示しましたように、スミスは、金銀を宝石や一有用な化石」などと同一視

しています。したがってまた、貨幣としての金銀もまた、他の商品同様、高い価格を支払う国を求めて運動すると考えます。勿論、このような考えを体系的に批判するためには長い長い話を必要とし、したがってここでは別の機会にゆずって省略するより他ありませんが、貨幣の特質を無視したこのような考えでは、貨幣に関連した経済現象はなにひとつ正しく理解できないのではないかと思われまふ。

以上が、「物価水準の国際的差異」に関するスミスの理論のおおよその輪郭です。スミス自身、「余論(digression)」と称して述べたことですから、まともに問題にする方がそもそもいけないのかも知れませんが、それにしても、スミスのこの話は巨匠の名にふさわしくないお粗末なものです。ここでのスミスの功績を強いて求めるなら、「物価水準は国によって異なるようだ」ということを人々に気付かせたところにあるといつてよいかと思ひます。しかし、それだけです。一般的に云えば、スミスは矮小な人物として取扱われるような人では決してありませんが、ここ「物価水準の国際的差異」に関するかぎりでは、主役の登場を前触れする道化師、露払いの役にとどまっているとしかいへません。

三

「物価水準の国際的差異」に関する重商主義者の理論、それに対するスミスの批判という歴史的背景の中でリカードの理論に接しますと、私たちは彼が意外なほど重商主義的であることに気がきます。彼は、重商主義者と同じく、「富国ほど貨幣価値は低い」という命題を提起します。また、重商主義者が愛好した通貨数量説、すなわち、一通貨の価値はその量がふえるにつれて下落する」という命題を是認します。その他、彼が一八二三年にかき、のちに一八四四

年のピール条例に示唆を与えた、「国立銀行の設立計画」は重商主義者も顔負けするほどの重金主義的なものです。一体、これはどうしたことなのでしょう。リカードは十九世紀の重商主義者、月おくれの雑誌のような人物なのでしょう。いや、そうではありません。それどころか、彼は、同時代の他の誰にもまして、自分の生きた時代、すなわち、産業資本が社会的に確立し、資本主義的生産様式がその本史を開始した十九世紀初期の時代を可能なかぎり忠実に理論に反映しました。それにもかかわらず、その理論が重商主義的な性格をもっているとすれば、それはほかでもありません、かんじんの現実の資本主義的生産様式自身が重商主義的性格をもっているということなのです。この点は経済学をすすめてゆく上での大事なポイントです。ですから、リカードは現実の世界を冷酷なまでに忠実に理論に反映させたが故に、重商主義と一見似た理論を展開することになったというべきでしょう。そのことは、他方、そのかぎり、彼がロマンティストのスミス、反重商主義のスミスに批判的であることを意味します。一般に、リカードはスミスの理論を継承し、発展させた人と考えられています。たしかに、リカードはスミスの投下労働価値説を継承して、それを自分の経済学の全理論の基礎に据えました。また、リカードはスミスと同じく自由貿易を主張しました。しかし、他面、第一章ですでにみましたように、彼の世界観はスミスのそれとは反対であり、また第二章でみましたが、彼の外国貿易論、すなわち、自由貿易に彼が持たせた意味合いは、スミスの自由貿易論に対する批判、否定を示唆しています。勿論、万事に控え目なりカードはスミス批判として理論を展開してはいません。しかし、リカードの理論は結局のところ、そういう性格をもっています。そのことは、この「物価水準の国際的差異」についてもいえ、リカードは、スミスの「富国ほど貨幣価値は高い」という命題に対して、「富国ほど貨幣価値は低い」という命題を対置することになりました。その点をこれからお話ししてゆきたいと思います。

リカードは初期の論文「地金の高価格（一八一〇年）」では、「貨幣価値はすべての国で同じである」と述べています。

「最も定評のある経済学者達は、銀行が設立される以前には、世界の商品の流通に用いられる貴金属は、諸国の商業と富の状態に依じて、それ故にまたそれらの国々がおこなう支払いの数と頻度に依じて、地球上のさまざまな文明国の間に、ある比率をなして分配されると考えた。そのように分配されているときには、貴金属はそれらの国のどこにおいても同じ価値を保つであらう。」(The Works and... of D. Ricardo, Vol. III, p. 52. なお、傍点は引用者のもの)

ここではリカードはまだスミスの世界観の影響を受けています。すなわち、スミスと同じく、彼は世界を一樣な価値圏、等価交換の法則の作用する場所と考え、したがってまた、世界の諸国がすべて貴金属を貨幣としているのなら、世界は統一的な貨幣制度の下にあるのと同じとみなしてよいと考えているわけです。そうであるなら、たしかに貴金属はどここの国においても同じ価値を保つでありましょう。

しかし、スミスの「生産力の均等分布」の世界観から脱却して、「生産力の不均等分布」の世界観に到達したリカードは、貴金属の国際的価値に関しても、スミスばりの考えから急速に脱却してゆきます。その経過は次のようなものです。すなわち、前章までにおいてみましたように、リカードは一八一七年の「経済学および課税の原理」において、「生産力の不均等分布」と「相互的外国貿易」という現実世界に対する事実認識から、物々交換的説明の下にはありますが、一外国貿易における不等価交換」を帰結しました。ところが、リカードはそれだけにとどまらず、すぐそれにつづいて、その問題の中へ貨幣を持込み、商品に価格表現を与えるとどういふ問題が生じるかの検討に入ります。

す。このような話のすすめ方は古典派経済学に特徴的なものです。すなわち、リカードにかぎらず、一般に古典派経済学者は、資本主義社会を商業社会ととらえ、流通過程を商品と商品の交換過程、いや、生産物と生産物の交換過程と理解するその必然的結果として、貨幣を商品流通の媒介物、したがってまた、経済社会にとって非本質的なものと考えました。そのような社会観は経済学の方法にも影響を与え、彼らは、経済現象をその基本的性格において理解しようとするときにはいつでも、無用な複雑さと混乱を推論に与えないためにも、その非本質的な貨幣を捨象して即物的に、物々交換の世界でまず考察し、そこで基本的な命題を獲得したのちに、話にただ現実性を与えるために貨幣を持込み、物々交換の世界を価格の世界に書き替えました。J・S・ミルの次の言葉はこの点の考え方を明瞭に語っています。

「すべて貿易というものは、実際においては物々交換であつて、貨幣はもろもろの物品を互いに交換するための単なる道具にすぎないものであるから、私たちは、簡単にするために、国際貿易は、その形態において一商品の他の商品に対する実際の現物交換である（実際においてはそれはいつもこれである）と仮定することによって、はじめよう。これまでのところで、私たちは、交易に関する諸法則は、貨幣が使用されると否とにかかわらず、すべて本質上同じであつて、貨幣はこれらの一般的法則を支配するものでは決してなく、いつもこれに従うものであるということを知ったのであつた。」（J. S. Mill, *Principles of Political Economy*. [1st ed. 1848], Ashley ed., 1909, p. 583, 岩

波文庫訳、第三分冊、二七八～九頁）

リカードの社会観および経済学の方法もこのミルの考え方と同じであります。ただ、リカードは、この他に分配問題、の経済学者にふさわしく「金はどのような原理にもとづいて各国へ分配されるか」、または、「生産力の不均等分布、

外国貿易における不等価交換の下では、諸国への貨幣の分配を規制する原理はどのように変更されるか」という問題意識の下に貨幣を持込みます。物々交換の世界での話につづく、価格の世界での話をリカードは次のような文章ではじめます。

「金および銀が流通の一般的媒介物に選ばれているので、これらの金属は、商業上の競争により、かかる金属が全く存在せず、諸国間の貿易が純然たる物々交換であった場合におこなわれる筈の自然的取引に適應するような割合において、世界各国の間に分配されるのである。」(The Works……of D. Ricardo, Vol. I, p. 137, 岩波文庫訳、上巻、三五頁)

要するに、リカードは、貨幣は非本質的なものだから、貨幣を持ちこんだからといって事態が本質的に変わる筋合いのものではない、だから、物々交換の世界で考えた外国貿易論は価格の世界においても依然として有効である、すなわち、価格の世界においても、イギリスはロシアを輸出し、ポルトガルはブドウ酒を輸出する、と考えます。それならば、そういう輸出入関係を支えるためには価格関係はどういう風なものでなければならぬか、その点をリカードは次のように述べます。

「すなわち、ロシアがポルトガルに輸入されるのは、それがその国で、輸出元の国(イギリスのこと―引用者)で費されるよりも多量の金に対して売れるのでなければあり得ぬことであり、またブドウ酒がイギリスへ輸入されるのは、それがイギリスでポルトガルで費されるよりも多量の金に対して売れるのでなければありえないことである。」(The Works……of D. Ricardo, p. 137, 岩波文庫訳、上巻、三五頁)

商品の所有者がその商品を安く売ることに努力するはずはないのですから、この発言は当たり前といえは当り前です

が、それにもかかわらず、この発言は比較生産費説においては重要な意味をもっています。というのは、私たちは、第二章において、イギリスとポルトガルの価値関係が第3—1表のⅠのようなときに、イギリスがラシャを輸出し、ポルトガルがブドウ酒を輸出することを示しました。そしてそのことが価格の世界でもおこなわれうるためには、たとえば第3—2表のⅢのような価格関係が成立していなければならないことを示しました。この場合、この価格関係の

第3-1表 価値表
(単位：ラシャ1ヤール当り価値量,
ブドウ酒1リットル当り価値量)

		ラ	シ	ャ	ブドウ酒
Ⅰ	イギリス	80			90
	ポルトガル	120			100
Ⅱ	イギリス	88			100
	ポルトガル	120			100
Ⅲ	イギリス	96			108
	ポルトガル	120			100
Ⅳ	イギリス	120			135
	ポルトガル	120			100
Ⅴ	イギリス	136			153
	ポルトガル	120			100

第3-2表 価格表
(単位：シリング)

		ラ	シ	ャ	ブドウ酒
Ⅰ	イギリス	80			90
	ポルトガル	120			100
Ⅱ	イギリス	88			100
	ポルトガル	120			100
Ⅲ	イギリス	96			108
	ポルトガル	120			100
Ⅳ	イギリス	120			135
	ポルトガル	120			100
Ⅴ	イギリス	136			153
	ポルトガル	120			100

底にある価値関係が第3—1表のⅢのようなものであるなら、すなわち、価格関係が価値関係をそのまま反映してゐるにすぎないのなら、それは国内交易、国内市場の場合と同じでありますから、改めてリカードの発言に注目する必要はありません。しかし、価値関係が第3—1表のⅠのようなものであるときに、価格の世界がイギリスがラシャを輸出し、ポルトガルがブドウ酒を輸出するという価格関係でなければならないということになりますと、価格の世界

は、国内市場におけるように第3―2表のIではなく、たとえば第3―2表のIIIでなければならぬということになります。ということは、価値関係表から価格関係表への表の書き替えが外国貿易、世界市場の場合には国内交易、国内市場の場合と異なるということです。このことがあるからこそ、リカードは一見きわめて当り前のことを改めて発言したのでしょうし、私たちとしても国内交易の場合でしたら一顧だに値しないこの発言に事改めて注目するわけです。

ところで、もし、そうとすれば、ここで次の問題が生じてきます。すなわち、第3―1表のIのような価値関係が第3―2表のIIIのような価格関係となって現われた場合、商品価値に価格表現を与える鏡の役割を果たしている貨幣の価値の方にはどういう変化が生じるのでしょうか。私たちは第二章においては、商品の側だけを考え、生産力の高い先進国ほど、価格表現を受けるさいに商品価値が割増評価を受けることを示しました。しかし、このことは貨幣の側についていえるかどうかのことなのでしょうか。先進国と後進国とでは貨幣価値になにか差異が生じるのでしょうか。いわば比較生産費説を貨幣面からみてみようというわけです。

この問題の解決にむかって、リカードは論理感覚豊かにすすんでゆきます。そのさい、よいことは、彼が「資本主義世界における生産力の不均等発展」、または、「資本主義世界における生産力分布の構造的不均衡」という現実の事態をつねにふまえ、生産力問題をたえず念頭におきながら問題の解決にあたっていることです。しかし、それにして、彼の説明は比較生産費説のときにもまして晦渋です。また繰り返しが多く、いろいろの論点がまぎれこんでいます。前人未到の地を切拓くときには、そういうことは往々にしてありがちのことですから、あまり彼を責めるわけにもゆきませんが、今日、私たちがその迂余曲折した話を文字どおり迂余曲折して追跡する必要もないと思いますの

で、ここでは簡潔に図式化して彼の論理構造を示してみたいと思います。

私の思いますには、前述の問題に対するリカードの理論は次のようなものです。第3—3表を参照しながら聞いて頂きたいと思います。

第一段階。原均衡（第3—3表のⅠ）。ここでは価格関係は価値関係をそのまま反映し、またその価格関係の下では、イギリスはラシャを、ポルトガルはブドウ酒を輸出するということで相互的外国貿易がおこなわれています。価格表における矢印は商品の輸出入の方向を示しています。

第二段階。不均衡（第3—3表のⅡ）。イギリスのブドウ酒の生産技術に改良が生じ、ポルトガルよりも安い価格でブドウ酒が生産できるようになったとします。したがって、イギリスはラシャもブドウ酒も輸出し、ポルトガルは

第3-3表 「貨幣価値の国際的差異」の生じる事情（リカードの考え）

		価値表		価格表	
		(単位は第3-1表に同じ)		(単位は第3-2表に同じ)	
	ラシャ	ブドウ酒	ラシャ	ブドウ酒	
Ⅰ	イギリス 80	105	80	105	
	ポルトガル 120	100	↓ 120	↑ 100	
Ⅱ	イギリス 80	90	80	99	(ポルトガルからイギリスへ金が入る)
	ポルトガル 120	100	↓ 120	↑ 100	
Ⅲ	イギリス 80	90	88	99	(物価は10%上昇)
	ポルトガル 120	100	↓ 108	↑ 90	(物価は10%下落)

なにも輸出する商品がないので金を輸出します。

第三段階。再均衡（第3—3表のⅢ）。ポルトガルからイギリスへの金の流入は、通貨数量説が示すように、イギリスの物価を騰貴させ、ポルトガルの物価を下落させます。その結果、再び相互的外国貿易がおこなわれるようになります。

このような説明から次の二つの結論を導きだすことができます。

一、諸国間における生産力格差の変動、すなわち、生産力の比較的变化は諸国への貨幣の分配割合を変動させる。

ヨリ具体的には、生産力の高い国ほど貨幣が多く集まる。

二、生産力の高い国ほど物価が高くなる、または、貨幣価値が低くなる。

リカードがしたように、通貨数量説を媒介させるならば、この二つの結論は、事実上、第二の結論へとひとつにまとめることができます。リカードはそれを次のように述べます。

「製造工業の進歩がまだ幼稚で、すべての国の生産物がほとんど一樣に、容積の大きい、最も有用な諸貨物から成り立っている社会の初期の状態においては、諸国における貨幣の価値は、貴金属を供給する鉱山からの遠近によって主として左右されるであろう。しかるに社会の技術と改良とが進歩して、諸国民が特定の製造に長ずるに至れば、この遠近は依然として考慮の中に入るが、貴金属の価値は主としてこれら製造業の優劣によって左右されるであろう。」(The Works……of D. Ricardo, Vol. I, p. 113~1, 岩波文庫訳、上巻、一四二頁)

そしてこの問題を取扱うリカードの最終的狙いは、イギリスの穀物が外国の穀物より価値がヨリ小さいのに価格はヨリ高いという謎を解くこと、または、比較生産費説が物々交換的に説明したことを価格の世界においても説明する

ことにあるようです。

「このことがあるていどまで異なる諸国において貨幣の価値の異なる所以を説明するであろう。このことがわれわれに、国産の諸貨物、そして価値は比較的小さいが容積の大きい諸貨物の価格が、何故に他の諸原因とは別に、製造業の繁昌している国々で高いかを説明するであろう。全く同じ人口を有し、豊度等しき同量の土地が耕作され、農業の知識も同じである二国の中では、原生産物は、ヨリ秀れた熟練とヨリ良い機械とが輸出貨物の製造に用いられている国において、最も高価であろう。」(The Works...of D. Ricardo, Vol. I, p. 142; 岩波文庫訳、上巻、一四二頁)かくして、リカードは、「生産力の不均等分布」と「外国貿易における不等価交換」の事態に価格表現を与え、比較生産費説を貨幣面から見直してみることによって、「製造業の発達した国ほど貨幣価値は低い」という命題を確立します。これはスミスの「富国ほど貴金属の価格は高い」の命題とは逆です。しかし、スミスの富国概念が没資本主義的、没生産力的であることを考えますと、この勝負は明らかにリカードの勝ちです。他方、リカードのこの命題は「富国ほど貨幣価値は低い」という重商主義者の考えと外見上はたしかに似ています。しかし、第一に、リカードは、この点はスミスと同じく、「富国には金が多く集まる」と考えているのに対し、重商主義者は、「富国になるためには金を多く集めなければならぬ」という考え方ですし、第二に、リカードは生産力問題を考慮し、かつ「資本主義世界における生産力分布の構造的不均衡」という世界観の下に問題を考えているのに対し、重商主義者の命題は生産力意識のないものであり、また、資本主義世界に対するイメージの欠けたものであります。ですから、リカードの命題と重商主義者のそれとの類似はあくまで外見上のものであり、その実質的内容は全く異なっています。要するに、リカードのこの理論は、資本主義的生産様式がその本史の発展の中で形成した「生産力分布の構造的不均衡」の

事態をともに受けとめ、その世界観の論理的帰結として導きだしたものです。そのかぎりそれは、依然として資本主義社会に住んでいる現代の私たちにも、重大な示唆を与えています。というのは、ブルジョア経済学は、のちにこの章の「六」で、金本位制の自動的均衡回復作用論や購買力平価説の検討のさいに示しますように、資本主義社会を調和的なものとして描かなければならないその階級的使命に制約されて、リカードのこの理論を無視し、「資本主義世界における生産力分布の構造的不均衡」という事態を無視した没生産力的な理論を今日もなお展開しているからです。それだけにますます、私たちは、現代の資本主義世界を認識するさいにも、リカードが確立したこの命題、およびこの命題の背後にある彼の世界観をしっかりと念頭においておかなければなりません。

しかし、リカードのこの理論には、叙述の晦渋ということは別にしても不明瞭な点が、いくつかあります。そこで私たちは、リカードのこの理論の構造を確定するためにも、その不明瞭な点をひとつひとつときほぐしてゆきたいと思ひます。

第一に。リカードがここでの話で最終的にはっきりさせたいことは、「製造業の発達した先進国ほど貨幣価値は低い」ということですが、もし、このことをはっきりさせることだけでしたら、生産力関係の変動とか、金の流出入とかいうようなまわりくどい話をしないでも、直接に第3―1表のⅠと第3―2表のⅢとを対比、組み合わせることによって、この命題に到達できたのではないか、と思います。というのは、第三章でもすでに示しましたように、第3―1表のⅠの価値関係が第3―2表のⅢの価格関係として現象するさい、先進国の諸商品には価値の割増評価が生じますが、このことは貨幣についていえば、貨幣価値の割引評価ということになるからです。要するに、リカードには、ここで自分の取扱っている問題が、さきに物々交換的に問題にしたのと同じ問題を、ただ貨幣を介在させてもう一度

貨幣価値の問題として見直してみようという問題なのだという自覚がありません。その点がはっきりしているなら、リカードは、相互的外国貿易のおこなわれるような価格関係、すなわち、第3―3表のⅠの価格関係を土台にして、生産力の変わる話を展開してゆくよりも、むしろ、この価格関係の底にある価値関係は一体どうなっているのか、それは第3―1表のⅠのようなものなのか、それともⅢのようなものなのか、その点の掘り下げの方に話をすずめていったのではないかと思います。結局、リカードは、「生産力関係の変更は、各国への貴金属の分配をどのように変更するか」という、分配の経済学者にふさわしい問題意識をもちながら問題に接近したばかりに、「物々交換的に問題にしたことに価格表現を与えて貨幣の側から見直してみる」という、問題解決の直線的方法を採用することができなかったようです。

第二に。「製造業の発達した国ほど貨幣価値は低い」というとき、私たちは、製造業の発達している国では金一グラムに含まれている労働量そのものが少ないと考えるべきでしょうか、それとも、金一グラムに含まれている労働量はどの国でも同じなのだが、先進国では、商品価値が増増評価されるのと裏腹にそれに対応して、貨幣価値は割引評価されるのだと考えた方がよいでしょうか。同じことを別の面からいえば、これは、先進国ほど貨幣に含まれる労働量は少ないと考えた方がよいか、たとえば第3―2表のⅢで、イギリスの金一グラムに含まれている労働量はポルトガルの金一グラムに含まれている労働量の六分の五と考えた方がよいか、それとも、イギリスでもポルトガルでも貨幣に含まれている労働量は同じと考えた方がよいか、の問題になります。これはまた、金はどの国でも生産されると考えるべきか、それとも、ある遠いどこかでしか生産されないと考えるべきか、の問題でもあります。一般に、私たちはあとからくつつけるような理論にあまり頭をわずらわせるべきではありませんが、先進国における商品価値の

割増評価は厳然たる事実である以上、それを貨幣面から理論的に補充する場合にどう決着をつけるか、一応はつきりさせておかねばなりません。私は別段固執するわけではありませんが、第一に、どこの経済圏でも生産できる穀物とか衣服は貨幣になることができず、各経済圏にとって外来の (foreign) もの、たとえば金が貨幣になることからみて、第二に、のちに「六」で検討する「先進国でしか生産できない商品」が貨幣価値の国際的差異に与える影響などを考慮し、そのさいにも整合的になる理論をいまのうちから用意しておくということを考えますと、後者、すなわち、貨幣は第三国で生産されて外国貿易の当事国へ外から持込まれる。したがって、貨幣に含まれている労働量はどこの国でも同じ、したがって、先進国では貨幣価値は割引評価を受けている、と考えてみたいと思います。すなわち、先進国ほど貨幣価値はその実質よりも低く評価されているわけです。物価論になると途端に投下労働価値説を捨て去るリカードが、通貨数量説を援用して「先進国ほど貨幣価値が低い」というとき、その貨幣価値とはこういう意味のものであったようです。

第三に。しかし、先進国ほど貨幣価値が低いといっても、それはあくまでその国の商品に対してのこと、すなわち、貨幣の対内価値が低いといったまでのことで、外国貨幣との交換比率において、すなわち対外価値において低いわけではありません。イギリスの金六グラムはあくまでポルトガルの金六グラムと交換されるのであって、第3—2表のⅢが示唆するごとくイギリスの貨幣がポルトガルのそれに比して商品との関係で六分の一だけ低く評価されているからといって、イギリスの金六グラムとポルトガルの金五グラムとが交換されるわけではありません。すなわち、先進国ほど貨幣価値が低く評価されるといっても、それは外国為替相場、すなわち、外国貨幣との交換比率に表われるわけではありません。リカードはこの点を次のように注意しています。

「各国が当然持つべき貨幣量を正しく持っているときには、貨幣は、多くの商品に対してはその価値が五パーセント、一〇パーセント、いや二〇パーセントも異なることがあるかも知れないから、その価値はなるほど各国において同じではないが、しかし為替相場は平価どおりであろう。イギリスにおける一〇〇ポンド、または一〇〇ポンドに含まれている銀は一〇〇ポンドの手形、またはフランス、スペイン、またはオランダにおける銀の同一量を購入するであろう。」(The Works... of D. Ricardo, Vol. I, p. 147, 岩波文庫訳、上巻、一四七頁)

第四に。しかし、貨幣の価値と貨幣の交換価値とは異なりますから、貨幣の価値が製造業の発達した国ほど低く評価されているということは、貨幣の交換価値が製造業の発達した国ほど低い、または低く評価されているという意味ではありません。リカードの理論の範囲でいえば貨幣の交換価値はこの国においても大体同じです。と申しますのは、たしかに製造業の発達した国では貨幣価値は低く評価されていますが、相手の商品の価値の方も製造業の発達した国では後進国より小さいわけですから、商品の使用価値量で表現した貨幣の交換価値は、製造業の発達した国でも製造業の発達のおくれた国でも大体同じということになります。

第五に。物価は貨幣の交換価値と逆数の関係にありますから、貨幣の交換価値がイギリスとポルトガルとで大体同じということは、物価水準も亦、両国間で大体同じということです。実際、リカードのように、「生産力の不均等分布」というときの生産力を「一時間に生産できる生産物の量」というように厳密な形で理解し、その上、「両国においてともに生産できる二商品の相互的外国貿易」という場面で問題を考えるかぎり、製造業の発達した国と製造業の発達のおくれた国との間の物価水準の差異は、第3—2表でいうなら、せいぜい最大限Ⅳに示される程度の差異です。「物価水準の国際的差異」に関するリカードの理論も、その内実はこのていどのものだとということをわれわれはくれぐれ

も銘記しておかなければなりません。それはリカードが外国貿易論を展開するさい、その基礎にした例示、場面設定そのもののもつ限界であり、彼にしてみれば、その場面設定が許す論理的に可能なぎりぎりのところまで追求したわけです。したがって、このことは、他方で、もし、私たちが、第3―2表のⅣの壁を越えてⅤに達しようとするなら、それはリカードのような場面設定では到達できない、したがって、そのためにはリカードの例示と手を切らなければならぬことを暗示してもいるわけです。

しかも、それどころか、リカードの理論そのものは、製造業の発達したイギリスの物価水準が第3―2表のⅣになることさえ保証していません。リカードの理論が保証していることは、イギリスの物価水準が第3―2表のⅡからⅣまでの間で成立するということだけです。ですから、貨幣価値の点ならともかく、物価水準の点では、イギリスがポルトガルより物価水準が高くなるという保証さえありません。リカードの理論は、のちにみますように、「相互的
外国貿易になるような価格関係」というだけで、「貿易収支の均衡するような価格関係」というところへとはすみませんから、第3―2表のⅡとⅣの間に両国の物価水準が決まるというだけで、それ以上に、その間のどこに決まるかについてはなんともいえないのです。私が前項で、「製造業の発達した国でも製造業の発達のおくれた国でも物価水準は大体同じ」という曖昧な云い方をしたのも、こういうことを考えてのことだったのです。

尤も、こういうことは、現代の私たちがリカードの理論の構造を詰将棋のようにひとつひとつ論理的に詰めていった場合の話で、リカード自身の自覚症状としてはどうであったかということになりますと、察するに、話はまたおのずと別のことになりそうです。といいますのはこれはリカードに限ったことでなく古典派経済学者に共通した宿弊で、リカードなどはまだ軽症の方ですが、彼にしても価値と交換価値とを混同しているときがあります。

たとえば、一方では、彼は価値を交換価値とは異なるものとして正しく理解しています。

「セー氏に従えば、もしもロシア生産の困難が二倍になり、その結果、ロシアが以前に比して二倍量の諸貨物と交換されることになったならば、その価値は二倍になる。これに対して私は全く同意する。しかし、もしも諸貨物の生産にはなにか特殊の便宜が生じ、ロシア生産の困難は増大せず、したがってロシアは前の場合と同じく諸貨物の二倍量と交換されるならば、セー氏はロシアの価値は二倍になったと相変わらず云うであろうが、この問題に対する私の見解に従えば、ロシアは以前どおりの価値に留まり、諸貨物の価値は以前の半分になったと、セー氏はいうべきなのである。」(The Works……of D. Ricardo, Vol. I, p. 280~1, 岩波文庫訳、下巻、一四頁)

ところが、他方では、価値が交換価値と混同されたままに理解されています。リカードの「経済学および課税の原理」は次のような言葉ではじまります。

「一商品の価値、すなわち、それと交換される他の商品量は、その商品の生産に必要な相対的労働量によってきまる。」(The Works……of D. Ricardo, Vol. I, p. 11, 岩波文庫訳、上巻、一三頁)

「それと交換される他の商品量」とは交換価値のことですから、この「すなわち」は全然利いていません。このような混乱の源は、この「相、対、的、労働量」ですが、このような混同は、貨幣の「価値」についてもみられます。

「われわれが、異なる国々における金、銀あるいはその他の貨物の価値を高いとか低いとかいう場合には、われわれはつねに、それらのものを評価するある媒介物を挙げるべきである。もしそうでなければ、その命題になんの觀念をも附与することはできない。」(The Works……of D. Ricardo, Vol. I, p. 376~7, 岩波文庫訳、下巻、一九頁)

わたくしたちは価値をそのまま目にみることはできません。目にみることでできるのは他の商品を媒介にした交換

価値のみです。しかし、それにもかかわらず、わたくしたちは交換価値とは異なる概念としての、目には見えない価値を問題にすることはできますし、また、問題にしなければなりません。媒介物がなければ一なんの観念をも付与することはできない」などという問題ではありません。ところが、リカードは目にみえるものにしか関心を寄せない現世の俗世間的傾向に時折ひきずられて、価値を交換価値から独立させることを怠り、価値の名の下に、事実上、交換価値のことを語ります。ここでも、彼が「貨幣の価値」の名の下に語っていることは、実際問題として、「貨幣の交換価値」のことです。リカード自身もそのことには時折気づくらしく、そのときには、「金の比較的価値」という言葉を用いています。そのかぎりでは、彼は「物価水準の国際的差異」を問題にしているといえます。

ただ、話はさらに屈折するのですが、私どもが通常、「貨幣の交換価値」という場合、貨幣の対極にあるものは他の商品一般といいますが、他の商品全体であり、それだからこそ、「貨幣の交換価値」を問題にすることが、とりもなおさず、逆数的表現ではありませんが、物価水準を問題にしたことにもなるのでありますが、リカードの場合にはどうもそうではないらしく、ある特定の商品、すなわち、穀物に対する貨幣の交換価値を問題にしているようです。リカードは、第二十八章へくると、スミスと対比させてその点を次のように述べています。

「穀物で測れば、金が二国において非常にその価値を異にすることをわれわれはすでに知っている。私は、それが富国において低く、貧国において高いことを示すことに努めてきた。アダム・スミスの意見は別で、彼は、穀物で測った金の価値は富国において最も高いと考えている。」(The Works……of D. Ricardo, Vol. I, p. 377, 岩波文

庫訳、下巻、一〇頁)

どうも、言葉遣いの曖昧な人を相手にした話は、話自身も迂余曲折して、少々こみ入ってきましたが、結局、リカ

ードが、「製造業の発達した国ほど貨幣価値が低い」というとき、それは、「製造業の発達した国ほど貨幣の交換価値が低い」ということと離れがたく絡み合っており、さらに、後者の場合には、「製造業の発達した国ほど、穀物に対する貨幣の交換価値は低い」ということを意味していたようです。ですから、価値と交換価値とを混同しているばかりに、リカードの理論は、一見、物価水準の国際的差異に言及しているようにみえますが、その「貨幣の交換価値」が、「他の商品全体に対する貨幣の交換価値」ということではなく、「穀物に対する貨幣の交換価値」であるということになりますと、そこで論じられているのは、物価水準の国際的差異ではなく、穀物価格水準の国際的差異なのです。ですから、私たちは、リカードにおける価値と交換価値の混同を前提にしても、リカードの理論が物価水準の国際的差異を問題にしたとはいえないということを改めて知ります。実際、前にも述べましたように、リカードのような理論構造では、物価水準の国際的差異を示すことがそもそもできないのです。リカードの理論の前提・例示の中には、現実世界の中のか大事な事柄が汲み取られていないのです。

第六に。リカードは、「製造業の発達した国ほど貨幣が多く集まる」という命題から「製造業の発達した国ほど貨幣価値が低い」という命題を導きだすさい、重商主義者が愛好した通貨数量説、すなわち、「貨幣の価値はその数量に反比例する」という、あの学説を媒介にしていますが、この学説は外見の尤もらしさほどには科学的なものではありません。たしかに、輸出超過が続く、金が外国から流入してくるようになると、一国の物価は一般に上昇してきますが、それは購買力の増加、信用の膨脹等によるもので、通貨数量説のいうようなことのためではないでしょう。勿論、ここは通貨数量説を批判するための場ではありませんから、こまかい話は避けますが、通貨数量説の理論的難点とでもいべきものをいくつか挙げておきたいと思えます。

1. 通貨という言葉は、通常、貨幣と信用貨幣を含んだものとして用いられますが、信用貨幣のときならいざ知らず、貨幣の場合には、商品に対する価値関係に変動のないかぎり、その価値がその数量の変動につれて変動することはありません。一時的な攪乱は別ですし、貨幣を基礎に信用貨幣が発行されるときは別ですが。

2. 通貨がふえても、それに対応して商品もふえる場合には、通貨がふえたからといって物価が上がるとはいえません。

3. 物価を上げるのは通貨の数量ではなく通貨の有する購買力の使用です。後者は前者が増減すればほぼ同じく増減しますが、質的にも量的にも同一事ではありません。たとえばいま、通貨数量一億円、一年間に購買に充てられる回数四回として、そこへさらに通貨が一億円追加供給された場合、物価に与える影響は一億円対一億円、すなわち、一〇〇パーセントではなく、四億円対一億円、すなわち二五パーセントであります。

4. 通貨数量説がしているように、流通過程において常時存在するものとしての貨幣と、登場しては退場する経過的存在としての商品とを対立させて考えるのは異質なものの対立で論理的にみてもおかしいことです。経過的存在である商品に対立させようとするなら、通貨の方も経過的なものとして、すなわち登場しては退場するものとしての通貨を対置しなければなりません。そうなれば問題なのは通貨の存在数量ではなく、商品の購買に充てられる購買力および購買の数量であるということが判ってきます。

第七に。リカードは「製造業の発達した国ほど貨幣価値が低い」というとき、第3—3表のⅡおよびⅢで示しましたように、生産力の上昇↓一方的外国貿易↓輸出超過↓金の流入↓物価の騰貴、という論理で考えますが、これは金の輸出入が自由である金本位制が確立されているときの話で、金本位制が制限され、金の輸出入が禁止されていると

きには、輸出超過↓金の流入、とはならず、輸出超過↓外国為替相場の騰貴、となります。勿論、金の輸出入の自由のときにも、外国為替相場は変動しますが、それは金の輸出入費用を越えることのない狭い範囲内での変動です。それに反し、いまここで述べている外国為替相場の変動は、金の輸出入の開始という歯止めのない無制限な変動です。そして、この場合にも、製造業の発達した国は外国為替相場の上昇した分だけ他国に比して物価が上昇したことになります。ですから、まとめていいますと、製造業の発達した国ほど物価が高いという場合、その国の物価自身が高くなってそうなる場合と、その国の物価自身は上がらないのだが、外国為替相場の上昇の結果、そうなる場合と二つあるということです。すなわち、金の輸出入が自由の場合には、輸出超過↓金の流入↓物価の騰貴、となりますし、金の輸出入が禁止されているときは、輸出超過↓外国為替相場の上昇↓物価の（他国に比しての）騰貴となります。ですから、リカードの命題は、金の輸出入が自由でないときでも有効です。なお念のためにいえば、金の輸出入が自由でなくとも、外国為替相場を維持するために国際通貨、たとえばドルの輸出入が自由の場合、すなわちドルが自由に売買される場合には、問題の性格は金の輸出入と同じになります。

第八に。以前、私たちは、第3―1表のⅠと第3―2表のⅢとを組み合わせて、「先進国の商品価値は割増評価を受けている」、「外国貿易において先進国は後進国を搾取している」、「先進国ほど貨幣価値が低い」という結論を導きだしました。この場合、私たちは第3―1表のⅠの価値関係が第3―2表のⅢの価格関係になることを当然のことと前提しました。第二章では、リカードの比較生産費説とミルのそれとを比較検討することに話の重点がありましたので、この点に立入って論及できなかったのですが、よく考えてみますと、第3―1表のⅠのような価値関係にあるイギリス、ポルトガルの二国が第3―2表のⅠではなく第3―2表のⅢのような価格関係になるのは何故か、外国貿易

におけるどのような特殊事情が国内交易における場合と異なった表の書き替えを可能にするのか、私たちは、第3—2表のⅢのような価格関係の成立の意義を問題にする前に、そのような価格関係の成立の原因を問わなければならないことに改めて気付きます。

「製造業の発達した国ほど貨幣価値は低い」という帰結を導きだすさいのリカードの方法、それは第3—3表で示されていますが、彼のこの理論展開はこの点の解明を暗示しています。すなわち、これは古典派経済学に共通したことで、なにもリカードに限ったことではありませんが、彼は、一般に、流通過程を商品と商品との交換過程として理解したことと関連して、外国貿易といういつも物々交換的外国貿易を考えます。ところで、物々交換的外国貿易というものは、さしあたり第一に、相互的外国貿易を意味します。価格面でいうなら、両国がいずれも相手国よりもヨリ安く生産できる商品生産部門をもっているような価格関係を意味します。しかし、第二に、それだけではありません、物々交換においては与えるものと受取るものが等しいことからわかるように、輸出額と輸入額の一致するような外国貿易、すなわち貿易収支の均衡するような外国貿易という意味も物々交換的外国貿易というものはもっているであります。

勿論、のちのミルとは異なり、スミス、リカードの段階では、ラシヤおよびブドウ酒の輸出入の量までは問題にしませんので、貿易収支の均衡ということまではまだ問題にならず、専ら、貿易収支の均衡の必要条件である、「相互的外国貿易になるような価格関係」というところにとどまりますが、リカードがしているように、どんな価値関係に両国があるとしても、均衡状態においては、「相互的外国貿易になるような価格関係」になる筈だと彼らが考えるのも、もとはといえば、どのような価値関係に両国がおかれていようとも、貿易収支が均衡するような方向に価格関係が変

動する筈だと彼らが内心確信しているからなのです。

実際、現実問題としても、貿易外収支、資本収支ということはいま考えないとすれば、商品の輸出は相手国から貨幣を獲得するためにおこなわれるものである以上、そしてまた、相手国が無限に貨幣を所有しているのではない以上、そう一年毎にということではないにせよ、貿易収支は結局のところ均衡してゆかなければなりません。したがって資本主義世界の外国貿易にはそういう力が作用しているのです。価値関係についていえば、資本主義世界の外国貿易には、貿易収支の均衡の必要条件である「相互的外国貿易になるような価値関係」になるように、両国の価値関係に力が作用しているのです。これは外国貿易論をすすめてゆく上で非常に重要な点です。そしてリカードがしているように、生産力の優位が一方の国に片寄っているにもかかわらず、すなわち、価値関係どおりに価値関係が展開されるなら一方的外国貿易になりそうなのに、実際にはそうでなく、相互的外国貿易になるような価値関係が成立するのも、結局は、貿易収支の均衡に向っての力が作用しているからなのです。第3—1表のⅠの価値関係が第3—2表のⅢの価値関係となつて現象するのも、その原因は結局それなのです。第3—3表に示しましたリカードの説明も、このことが念頭にあつてのことなのです。スミスは、ある個所では、重商主義者の重金主義主張に反対するあまり、「外国貿易が継続的に赤字でも国家は繁栄しうる」と暴論を吐いて、のちにリストに噛み付かれています。概していえば、古典派経済学者は、スミスも含めて、外国貿易論を物々交換の世界で展開するというアナクロニズム的な方法を採用したばかりに、怪我の功名といひましょうか、外国貿易に作用する力という点では正しいものをつかんでいたといえましょう。

第九に。以前、第二章において、私たちはリカードに倣つて、資本主義世界を「生産力の不均等分布」の世界とし

て把えました。しかし、他方、リカードを批判して、資本の国際的移動の困難にもとづくその事態だけでは外国貿易に特有な現象は成立しない、すなわち、それだけでは、第3―1表のⅠの価値関係は第3―2表のⅠの価格関係となるだけで、これでは外国貿易論を特に設定する意味はない、外国貿易に特有な現象として、第3―1表のⅠの価値関係が第3―2表のⅢの価格関係となって現われるのは、イギリス、ポルトガル両国の通貨制度が相互に異なっているからである、したがって、「外国貿易における不等価交換」を問題にするには、単に「生産力の不均等分布」という事態だけでなく、「通貨制度の相違」という事態もふまえなければならぬ、ということを書きました。これは、ある意味では当然のことで、通貨制度が異なっていなければ、外国貿易なるもの自体がそもそも成立しませんし、いわんや貿易収支の均衡というようなことも問題になりません。しかし、通貨制度が異なっているということ自体は、第3―1表のⅠの価値関係を第3―2表のⅢの価格関係に推進する推進力ではありません。その推進力は「貿易収支の均衡」です。勿論、「通貨制度の相違」がなくてはどのようなものもありません。ですから、このようにいえます。すなわち、「通貨制度の相違」は第3―1表のⅠの価値関係を第3―2表のⅢの価格関係として現象させるための必要条件といえますか、形式的可能性です。そして、「貿易収支の均衡」へと外国貿易に作用する力が、この「通貨制度の相違」という形式的可能性を媒介として、第3―1表のⅠの価値関係が第3―2表のⅢの価格関係として現象することを現実化させている、このようにいってよいのではないかと思います。いずれにせよ、「生産力の不均等分布」、「通貨制度の相違」、「貿易収支の均衡」、外国貿易における不等価交換を成立させているこれら三つの要因の相互関連はくれぐれもはっきりわきまえておいて頂きたいと思います。

最後に。これは本格的には第四章で述べることですが、リカードは、折角、世界市場における先進国商品の価値の割

増評価、先進国貨幣の価値の割引評価という事態を説明しましたのに、このことのもっている経済的意義、それをふまえての政策的提言についてはなにも述べませんでした。リカードの外国貿易論は、もうすでになんども述べましたように、「外国貿易においては不等価交換がおこなわれている」、「その過程で先進国は利益を獲得し、後進国は損失を蒙っている」ということを示唆しました。しかし、リカードはその事実を淡々と述べるだけで、それ以上に、損得問題としては述べていません。賃金論、利潤論における搾取の問題のときと同様、彼は徹底して冷静な科学者として問題を取扱います。また現実の世界に対するそのような認識ができているなら、そこから、「一国は生産力を発展させればさせるほど、外国貿易から獲得できる利益の度合は大きくなる」という命題を導きだし、したがって、それ故に「二国は生産力の発展に努めるべきである」との政策提言をするまでにはほんの一步ですが、しかし、リカードはそういう提言めいたことは一言も云いません。この点は、次に述べるシーニョアが愛国心を發揮して生産力の発展を主張したのと極めて対照的です。リカードは金融問題などについては盛んに政策提言をしているのですから、政策主張に全く興味がなかったというわけでもないのでしょうか、一般的には、どうも、ああすべきだ、こうすべきだという類の話は好きでなかったようです。彼自身も、この点を、「マルサス著『経済学原理』への評注」において次のように述べています。

「セー氏は、忠告することは経済学者の仕事の領域ではないと述べているが、これは当を得た話である。——経済学者は、どのようにしたら富裕になれるかを話すことはできるが、しかし、彼は、怠惰より富を選べとか、富よりも怠惰を選べとかと忠告すべきではない。」（The Works……of D. Ricardo, Vol. II, p. 338, 岩波文庫（マルサス『経済学原

ここにも亦、リカードの経済学のクールな性格がよく表われています。

(第三章未完)